

興味本位の家：人を招き入れる空間の復権

大正以前の家は「接客本位」を理想とし、客間を中心として設計されていた。近代化とともに家は「家族本位」の場へと変わり、LDKを中心とした設計に変化した。そこでは人を招き入れる空間は縮小され存在感を失った。現代では核家族世帯が減少し、単身者世帯が増え、人々は情報端末を介して家の外の人と繋がるようになった。物理的な距離や個々の属性を超えて、価値観や趣味を共有する人々が繋がる。いわば「興味本位」が現代のコミュニティの特徴である。このような興味本位のフラットな繋がりを軸に、人を招き入れる空間の復権を促すこと、すなわち他者のための場所が再び家に生まれることに、価値観が多様化した今日における住宅の可能性があるのではないか。

興味本位の家には、住み手の興味を反映して、カフェや大きなキッチン、工房、あるいはギャラリーが設置されるかもしれない。そこは主客の関係性が強い接客本位の場ではない。接客空間の伝統知を適宜参照としながらも、フラットでヒエラルキーのない、「活動」を軸にした交流の場が現代にふさわしい。そのためには、設計者が興味・活動を精緻に理解し、興味を深めるための機能性・実用性を徹底的に検証し、興味を空間化してオープンに表現することが重要に思われる。家と街の緩衝となるような開放性と包容力が設計の鍵となる。そして、他者が興味本位で覗いてみたくなる建築であることもまた重要と考える。

興味本位のコミュニティの受け皿となる小屋を街と住宅の接点となる庭先につくることによって、価値観を共有する人々の新しい出会いが生まれると期待される。あるいは、子どもたちを含めた住宅街に住む人々が新たな興味に目覚め、そこから多世代の交流が始まるかもしれない。世代を超えて繋がることによって、そのコミュニティはより長く続いて行く。このような興味本位の家は空間的・時間的広がりを持つだろう。